

宝治元年『院御歌合』注釈 — 「早春霞」題 —

位藤 邦生・藤川 功和

はじめに

『院御歌合』（『百三十番歌合』、『後嵯峨院歌合』、『宝治歌合』等とも、本稿では「新編国歌大観」に拠る）は、後嵯峨院政初期の宝治元年（一二四七）に各歌人が出詠、加判を経て成立した、出詠歌人二十六人による十題、百三十番、総歌数二百六十首に及ぶ歌合である。仁治二年（一二四一）八月に八十歳で没した父藤原定家の跡を継いで、歌壇の指導者として歩み出した為家が判者を勤めており、為家単独撰である『統後撰和歌集』成立前夜の彼の和歌観や、後嵯峨院歌壇初期の内実を伺う上からも、当該歌合の持つ意味は少なくない。当該歌合に関しては、諸本の整理がなされている他、主に歌壇史や後嵯峨院歌壇研究の一環として先行研究がみえるが、一方で、当該歌合の注釈は未だなされていない。

位藤邦生を代表とする広島大学中世文芸研究会は、平成十六年四月から平成十七年三月にかけてほぼ週一回のペースで当該歌合の輪読を試みた。本稿は、その輪読の成果をもとに、位藤邦生・藤川功和が、あらためて検討した結果を公にし、大方の批正を仰ぐもので

ある。本稿では、「早春霞」題の十三番二十六首の注釈を示す。なお、研究会の輪読における担当者は以下の如くである。

一番―相原宏美（大学院文学研究科博士課程後期）、二番―大園岳雄（大学院文学研究科研究生）、三番―新居和美（大学院文学研究科博士課程後期）、四番―金岡文緒（大学院文学研究科博士課程前期）、五番―位藤邦生・藤川功和、六番―吉川洋子（文学部二年生）、七番―藤川、八番―金岡、九番―吉川、十番―金岡、十一番―位藤・藤川、十二番―新居、十三番―相原（所属は輪読時点）

凡 例

一、底本は、群書類従本（巻第二〇所収）を用いた。校合した諸本と略号は、以下の通り。

（書）―書陵部蔵本（『新編国歌大観』所収）、（聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）、（永）―永青文庫本（『細川家永青文庫叢刊』第八卷所収）、（内）―内閣文庫「百三十番歌合（外題）」本、（支）―九州大学支子文庫本

一、本文冒頭にある内題、題目録、作者目録の注釈はこれを略した。

一、番全体の本文と【校異】を示した後、【他書所伝】、【本歌】(適宜【参考歌】を併記)、【語釈】【通釈】を掲げた。

二、【語釈】の内重複する語については、紙幅の関係上略した。

三、表記や送り仮名の異同はこれを略した。

四、見せけちや補入符号のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

五、□は読み取り得ていない箇所を示す。

六、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

七、本文中、異同の存する箇所は、傍線及びイ、ロの如く付し、語釈を施した箇所は、本文右傍に①、②の如く番号を付した。

八、当該歌合以外の和歌の引用は、全て『新編国歌大観』に拠った。

九、引用文中、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一〇、主な参考文献は、巻末に一括して示した。

〈二番〉

一番 早春霞^①

左^イ勝 女房^②

いつくより春はきぬらん天の戸の明るをまたすたつ霞哉

右 承明門院小宰相

春きても猶氷しく衣川霞もいく重立わたるらん

左歌^③ 首尾相叶て、心詞花麗の姿にこそ侍るめれ、

右歌^④ 衣川氷しくはかりにて、かけても用なく見え侍る

うへに、猶氷れる程ならば、霞幾重とは事たかひて侍らん、いかさまにも、以左為勝、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) ロ ナシー続古今、春上、ハ はーの(支)

ニ をーも(永) ホ 左ー左の(書) ヘ 右ー右の(書)(永)

ト とはーとまでは(書)(永)、とては(聚)(内)(支) チ て

ーてや(書)(永) リ にもーにても(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続古今和歌集』巻第一・春歌上・六

宝治二年歌合に、早春霞を

いつくよりはるはきぬらんあまのとのあくるもまたすたつかすみかな

な

『題林愚抄』第一・春部一・八五

(早春霞)

続古

太上天皇

いつくより春はきぬらんあまの戸のあくるもまたす立つ霞かな

〈右歌〉 ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

『隣女集』巻第二・立春・一八八

いづくよりくる春なればあまのとのあくるもまたずかすみそむらん

【語釈】

①早春霞―「早春霞」題の先行例としては、慈鎮・定家・家隆・隆祐らが参加した元仁（『隆祐集』の「永仁」は誤り）二年（一二二五）三月、九条大納言（基家）家三十首御会がみえ、「早春霞 はるのさる霞の衣たちそめてまちしもしるしみわの山本」（『拾玉集』第四・詠三十首和歌・四六二二）、「早春霞 たちそめてけふやいくかの朝まだき霞もなれぬ春のさ衣」（『拾遺愚草』中・二〇五八）等が確認できる。

②女房―後嵯峨院を指す。歌合において、御製を「女房」と記す先例は、正治二年九月『院当座歌合』、正治二年十月『院当座歌合』、『仙洞十人歌合』、『老若五十首歌合』等に確認できる。『安斎隨筆』「歌合称「女房」禁中御歌合」が、「主上の御歌をば作者を女房とするす。」

（中略）判者判断して勝負を分くるにはばかりある故、女房の歌にしてはばかりなく判断すべきがためなり」と記す如く、本来は勝負付けにおいて、判者が憚りなく歌の優劣を判定するためのものであったが、後嵯峨院政期には既に記号化しており、後嵯峨院や宗尊親王の「女房」に負が付される例はみえない。後嵯峨院は、土御門院皇子で、母は源通子。仁治三年（一二四二）四条天皇の急逝に伴い即位。寛元四年（一二四六）正月、後深草天皇に讓位、長く院政を敷いた。『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』と、勅撰集を二度撰進させる。文永九年（一二二七）崩御。

③天の戸―もとは記紀にみえる高天原の入り口「天の岩戸」に同じ。当該歌では、「あまのとのあくるけしきもしづかにてくもみよりこそはるはたちけれ」（『新勅撰和歌集』巻第一・春歌上・二・藤原俊成）と同様、「明」と併せて用いられ、夜明けを喩える。

④承門院小宰相―藤原家隆女。生没年未詳。土御門院生母承門院在子に仕えた女房歌人。土御門院配流後は、後嵯峨院歌壇で活躍。

⑤衣川―陸奥国の歌枕。「夜をさむみいはまのこほりむすびあひていくへともなきころもがはかな」（永久三年『内大臣家後度歌合』・一・藤原忠通）等、嚴寒の情景を詠み込んだ例歌が散見する。また、地名の「衣」から、「たもとよりおつる涙はみちのくの衣河とぞいふべかりける」（『拾遺和歌集』巻第十二・恋二・七六二・よみ人しらず）の如く、縁語で結ばれる例がみえる。当該歌では、「うちつけに春のかすみを見わたせばころもがはにぞたちわたりける」（『千穎集』・二）と同様、「霞」「立つ」と、「衣」「裁つ」が各々縁語で結ばれている。

⑥首尾相叶―上の句と下の句とが無理なく結びついている事。「左歌、首尾相叶、ふるまひもありてをかし」（天徳四年『内裏歌合』十番・実頼判）、「左首尾相叶ひてころも詞よろしくこそ侍れ」（『別雷社歌合』十一番・俊成判）等の用例がみえる。

⑦花麗―花やかな麗しさをいう。『瑩玉集』「やさしく花なる歌」「天の戸をおし開けがたの雲間より神代の月のかげぞ残れる」「松島やをしまの磯にあさりせし海士の袖こそかくはぬれしか」二首の歌評、

「姿詞花麗を先として、遠く世の塵をはなれたり。中にもはじめの歌は、いかになみく、の品にあらず」とあるのによれば、「やさし」さや端正清純な美しき、品格をも含有する。

⑧事たかひて『千五百番歌合』「雲つづくとをちのさとのゆふがすみたえまたえまにかへるかりがね」(三十九番左・七七・小侍従) に対する忠良判「左、雲つづくとおきて又たえまたえまと待る、はじめをはりことたがひてや」の如く、一首の中で詠み込まれた言葉同士に論理的な矛盾が生じている場合等を指す。

【通釈】

一番 早春の霞

左歌 勝

女房 (後嵯峨院)

いったいどこから春はやつてきたのだろうか。(天の岩戸が開くかのように) 夜が明けるのを待たずに立つ霞であるよ。

右歌

承明門院小宰相

春が来てもまだ(まるで衣を敷いたように) 一面に氷が張っている衣川には、霞も幾重にか、裁ち重ねた衣のように立ちわたっていることであろう。

【判詞】左歌は上下の句がよく合っており、心(歌の内容)・詞(表現)とも品格のある美しい姿をしているようです。右歌の衣川は氷が敷きつめているというばかりで、詠み込む必要はまったくなく見えます上に、まだ氷つている状態ならば、「霞幾重」とは矛盾してしまうでしょう。どのように見ましても、左を勝とする。

△二番

二番

左

① 太政大臣

皇の御代さかふへき春なれば霞をこめて立や出まし

右

⑤ 俊成卿女

君かため猶万代の春の色に霞そめたる明ほの、空

左の御代栄ふへき春、世皆可希事に侍るうへに、

下句、そのいはれ聞えて、おかしく侍るにや、右君かため

猶万代といへる、又捨かたく侍れば、両方の祝は、

なすらへて持とす、

【校異】

イ 持ーナシ(書) □ ふーゆ(書)(永) 八 立ー春(支)

ニ 卿ーナシ(支) ホ ふーゆ(書) へ 可希事ーこひねがふべ

きこと(書)(聚)(永)(内)(支) ト 右ーナシ(書) チ 猶ー

を(支) リ とーのと(書)(永) 又 祝はー祝言を(書)、祝は

(聚)、祝言(永) ル 持とすー為持(書)(聚)(永)(内)(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 太政大臣ー現任なら源通光だが、『夫木和歌抄』収載当該歌合出詠歌の作者記載(「常盤井入道太政大臣」)や歌の内容から、前太政

大臣西園寺実氏と推定される。実氏は、建久五年（一一九四）に西園寺公経と一条能保女の間生まれ。仁治三年（一二四二）女皇子が後嵯峨天皇に入内、翌年久仁親王（後深草天皇）が誕生。当該歌合時点で、実氏は今上帝の外祖父。院評定衆、関東申次の任にもあり、後嵯峨院政下において極めて重要な位置にあった。文永六年（一二六九）没。

②皇―「すべらぎ」、「すめらぎ」、「すめろぎ」等とも。天皇の尊称。多く枕詞的に用いられ、当該歌では、「御代」にかかる。

③霞をこめて―他動詞としての「こむ」は、一義的には、「秋の月ひとへにあかぬものならばなみだをこめてやどしてぞみる」（『伊勢集』・三〇二）の如く、「(対象を)ある物の中へ入れる」とじ込める」という意で用いられ、当該歌の場合、「霞を《散らすことなく一面に》とじ込めて」という意になる。「かすみさへたなびくのべのまつなればそらにぞ君がちよはしらるる」（『後拾遺和歌集』第七・賀・四二八・源兼澄）では、子の日に小松を引く男女の姿によせて、「たなびく」に「引く」を掛け、霞棚引く空にまで東三条院の長寿が約束されたと詠じる。また、定家詠「春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの苔のみどりに」（『建保名所百首』春二十首・水無瀬河・一九五）の如く、霞は、仙洞御所を連想させる表現でもあり、当該歌の「霞」は、後嵯峨院政の恒久を暗示する祝言として機能している。

④立や出まし―春が立ち出るの意。「立」は「霞」の縁語でもある。

一方、「郭公こゑまつほどはかたをかのもりのしづくにたちやぬれまし」（『紫式部集』・一三）、「かぞへつるこよひの月はくもるともまつとしきかばたちやいでまし」（『実家集』・三二六）等の如く、「やぐまし」は多く「くしようか」と視点人物の意志を表すことから、「皇の御代」を言祝ぐ実氏自身の主張をも含んでいると解せる。「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまを誰かとがめむ」（『源氏物語』若菜上・明石の尼君）、「おいのなみなほたちいづるわかのうちらにあはれはかけよすみよしの神」（『千五百番歌合』千四百九十三番左・二九八六・讃岐）等、「立ち出づ」には、「表だつた場へ出る」という意があり、今上帝の外祖父や院の評定衆として今後の院政下において一役買おうとする自らの意思を叙景歌の裏に暗に主張するか。

⑤俊成卿女―藤原盛頼女。俊成孫。生没年未詳。後鳥羽院歌壇で歌人として開花。晩年は播磨国越部庄に住した。

⑥猶万代の春―御代の長久を意味する「万代の春」に「さらに、ますます」という意の「猶」を加え誇張する。「うごきなくなほ万代ぞたのむべきはこやの山のみねの松かげ」（『千載和歌集』巻第十・賀歌・六二五・式子内親王）がその例。

⑦春の色―漢語「春色」を源泉とし、春の気配を指す。早くは『古今和歌集』に「春の色のいたりいたらぬさとはあらじさけるさかざる花の見ゆらむ」（巻第二・春歌下・九三・よみ人しらず）とある。

⑧霞そめたる―霞が棚引き始める意。左歌同様、霞が立つことに祝

意が込められている。

⑨両方の祝は、なすらへて持とす―『八雲御抄』巻第一・正義部に「祝歌は勝也」とみえ、祝の心を詠み込んだ歌は、単なる歌の優劣から離れた評価を受けていた。

【通釈】

二番

左歌 持

太政大臣(西園寺実氏)

天皇と院の御代がこれから弥々栄えるであろう今年の春であるので、霞を(散らすことなく)とじ込めて、春がその中から立ち出るように、私も補佐役として一役買おう。

右歌

俊成卿女

院の(治世を言祝ぐ)ために限らない栄えを湛えるこの春の様子に(さらに祝意を加えるかのように)霞み始める明け方の空よ。

〔判詞〕左歌の「御代栄ふへき春」は、世の人々皆が希求するはずの事であります上に、下の句は、その(院の治世が繁栄する)証が聞こえて、見事でしょうか。右歌の「君かため猶万代」という(表現は)、又捨てがたいですので、両歌の祝意は、肩を並べて持とする。

〈三番〉

三番

左

① 権大納言源朝臣通忠

右

⑤ 権大納言藤原朝臣実雄

かすか野の草^③のはつかに雪消て緑も寒く霞む比かな
梓弓^⑥をして春こそぎにけらし野山をこめて霞たなひく
左のかすか野、めつらしき所は見え侍らぬうへに、
みとりも寒くかすむ比かなと侍るや、少し心ゆかぬ
やうに侍らん、右の野山のかすみをこめて、歌^⑦から
いさゝか立増ると申へくや、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) □ のーナシ(永) 八 かすみをこめて―霞

をしこめて(聚)(内)、霞はをしこめて(永)

※九州大学支子文庫本は、大幅に本文が異なるので全文を示す。

三番

左

権大納言源朝臣通忠

梓弓おして春こそぎにけらし野山をこめて霞たなひく

右

本に此番の哥落歟 □ 無之

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九〇

宝治御歌合

実雄卿

梓弓おして春こそきにけらし野山をこめてかすみたなびく

【語釈】

①権大納言源朝臣通忠―源通光男。母は藤原範光女。建保四年（一二二六）生まれ。正二位大納言に至る。建長二年（一二五〇）没。

②かすか野―春日野。大和国の歌枕。現在の奈良公園一帯の丘陵地をさす。「かすがのはゆきのみつむとみしかどもおひいづるものはわかかなりけり」（『後拾遺和歌集』第一・春上・三五・和泉式部）
「春日野のしたもえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪」（『新古今和歌集』巻第一・春歌上・十・源国信）等、春が到来しても春日野には未だ雪が降り積もっているという例歌が散見する。

③草のはつかに―「はつかに」は、わずかな程度を指す。通常、「かすがのゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも」（『古今和歌集』巻第十一・恋歌一・四七八・壬生忠岑）の如く、「はつかに」が下の動詞にかかり「ほんの少しくである」となる。当該歌では、「はつかに」は蝶番のように、「草のはつかに」「はつかに雪消て」の両方に掛かり、「ほんの少し消えた雪間から僅かに見える若草」という意をあらわす。

④緑も寒く―所謂共感覚表現。ここでは視覚表現「緑」と触覚「寒」が組み合わせられており、春が到来し春日野は霞がかっているのに、

雪間の緑が、いかにも寒々しく見える様をいう。「ひかすふる雪げにまさる炭がまの煙もさむしおほ原の里」（『新古今和歌集』巻第六・冬歌・六九〇・式子内親王）、「あけわたる雲まのほしのひかりまで山のはさむしみねのしらゆき」（『新勅撰和歌集』巻第六・冬歌・四二四・藤原家隆）等がその例。

⑤権大納言藤原朝臣実雄―西園寺公経男。母は平親宗女。建保五年（一二二七）生まれ。後宇多天皇・伏見天皇の外祖父。洞院家の祖。従一位左大臣に至る。文永十年（一二七三）没。

⑥梓弓―梓の木で作った弓。『万葉集』の時代から枕詞的に用いられた。当該歌では、「梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかかなつみてむ」（『古今和歌集』巻第一・春歌上・二〇・よみ人しらす）の如く、「梓弓おして」までが「春」の序詞で、「おして」は「おしなべて」（あたり一面に）の意である。

⑦歌から―「時しらぬ雪に光やさえぬらんふじの高根の秋のよの月」（建長三年『影供歌合』百十四番右・藤原教定）に対する判「ゆきにさえたるふじのたかねの月、歌がらたけたかくきよげにみえ侍りし」の如く、歌全体の品格を指す。なお、歌合判詞においては、「おほかた歌がらはなだらかなり」（元永元年十月二日『内大臣家歌合』三番・源俊頼判）の如く、声調に関して用いられる場合もある。

【通釈】

三番

左歌

権大納言源朝臣通忠

春日野の若草が僅かに、ほんの少し消えた雪間からみえる、(その雪間の) 緑も寒々しく霞む頃であるよ。

右歌 勝

権大納言藤原朝臣実雄

あたり一面に春がきたらしい。野山をあたかも包み込むかのよう霞がたなびいている。

〔判詞〕左歌の「かすか野」、珍しい所は見えませんが、「みとりも寒くかすむ比かな」とありますのは、少し納得がゆかないありません。右歌の「野山が霞をおし包んで」(とあるのは)、歌の品格がわずかばかりすぐれていると申すべきでしょうか。

〈四番〉

四番

左^イ掛

権大納言藤原朝臣定雅

梓弓春のみ空にいつなれてやかて霞の立かさぬらん

右

権大納言藤原朝臣公相

浅みとり春の日数もしられりまた色薄き山の霞に

左かすみを、春のみ空にいつなれてと侍るや、いかに

そ見え侍らん、春に霞はたちそへるものにごそ

中ならひて侍れば、あつき弓も春はかりにて、又引よせられたる事は侍らぬにや、右また色うすき霞にて、早春をされる心、さもやと見え侍るを、ふかき迄の難には侍らねと、傍題の山や、花よりさきに出て侍らん、かれこれをなすらへて、持にて侍るへきにごそ、

【校異】

イ 持ーナシ(書) 口 藤原朝臣ーナシ(聚) 八 日数ー霞(聚)
 (内) (支) 二 左かすみー左のかすみ(永)、左哥(支) ホ みーナシ(書) へ はーナシ(書) (永) ト はーも(書) (永) チ さもーき、(支) リ 傍題ーかたはら題(書)、かたはらの題(書) (永) 又 山やーやまや(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 権大納言藤原朝臣定雅ー建保六年(一一二八)生まれ。藤原忠経男。母は藤原宗行女。正二位右大臣に至る。永仁二年(一一九四)没。
 ② いつなれてー「いつ」は「いつしか」の略で、早くもの意であろう。「なれる」には、「衣服が体によくなじむようになる」の意もあり、下句「立」(裁)と縁語的に響き合っている。
 ③ 霞の立かさぬらんー「立」は霞の縁語。「としをへて立ちかさぬれ

ばみよし野の霞ぞ山のころもなりける」(『久安百首』春二十首・六

〇五・藤原親隆)、「日をへつつ立ちやかさねん吉野山霞の衣まだ一重なり」(『治承三十六人歌合』十二番左・山霞漸聳・二一九・藤原経家)等、「衣」と併せて用い柵引く霞を衣に見立てる例がみえる。

④権大納言藤原朝臣公相―貞応二年(一二三三)年生まれ。西園寺実氏二男。従一位太政大臣に至る。文永四年(一二六七)没。

⑤浅みとり―薄い緑色。当該歌では、「あさみどりはるをきぬとやみよしののやまのかすみのおびにみゆらん」(『忠見集』・七〇)の如く、枕詞的に用いられており、「春」にかかる。また、「あはれなり我が身のはてやあさみどりつひには野辺の霞とおもへば」(『新古今和歌集』巻第八・哀傷歌・七五八・小野小町)の如く、「浅みとり」は、「霞」にもかかる。

⑥引よせられたる事―引き合わせるが原義。ここでは一首の中で関連するある語とある語を同時に詠み込むこと。「袖のいろはわかむらさきにあらなくにこころをそむるしのぶもぢずり」(『千五百番歌合』千百三十五番左・二二六八・藤原隆信)について、「左、わかむらさきにしのぶもぢずりをひきよせられたるは、たよりありてきこえはべる」と、『伊勢物語』初段を踏まえた二語を詠み込んでいるとの指摘がみえる。当該歌では、「弓」と「春」(張る)が縁語。

⑦傍題―題詠で、題の中心となることを詠まないで、題に添えたほかのことを中心に詠むこと。『竹園抄』は、「月」の傍題の例歌「月夜には光ぞまさる玉川の卯花垣の里をとばばや」について、「月を

そばに成て、卯の花を讃たる歌なり」とする。

【通釈】

四番

左歌 持

権大納言藤原朝臣定雅

春はみ空に早くも馴れたのだろうか。そうしてそのまま引き続いて、今頃は霞が(まるで衣のように)立ち重なっていることだろう。

右歌

権大納言藤原朝臣公相

春が来て以来の日数の浅さも知られることだよ。山の緑がまだ薄く、浅みどり色の霞がかかっているのです。

〔判詞〕左歌は霞を、「春のみ空にいつなれて」とありますのは、さあいかが見えるでしょう。春に霞は立ち添うものと申す習わしでありますので、「あつき弓」も「春(張る)」だけのことで、又(他に)引き付け関係づけられているものはないのでしょうか。右歌のまだ色が薄い霞によつて、早春を知る心は、そうであろうと見えますが、重大というほどの欠点ではありませんが、傍題の「山」が、「花」より先に出てきてしまいます。あれこれを並べ比べて、持であるべきでしょう。

〈五番〉

五番

左イ勝

権大納言藤原朝臣公基

今も猶雪は降つゝ朝霞たてるやいつこはるはきにけり

右

左近少将藤原朝臣為教

天の戸の明ゆく空は霞つゝ又あら玉の春は来にけり

左雪は降つゝ朝霞たてるやいつこと侍る、殊に

よろしく侍るにや、右天の戸明暮みなれて侍れば、

尤イ以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続拾遺、春上(聚) ハ 左近―左

近権(永)、左近衛(支) ニ あら玉の―あらたまる(書)、あら

玉ユの(永) ホ 左雪―左の雪(支) ヘ 左―ナシ(支)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続拾遺和歌集』巻第一・春歌上・七

宝治元年十首歌合に、早春霞

万里小路右大臣

いまも猶雪はふりつつ朝がすみたてるやいづこ春はきにけり

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九一

(宝治御歌合)

為教朝臣

あまの戸の明行く空は霞みつつまたあらたまる春はきにけり

【本歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』巻第一・春歌上・三・よみ人しらず

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ

【参考歌】

〈左歌〉

『正治初度百首』一四〇六・藤原家隆

(春)

けふも猶雪はふりつつ春がすみたてるやいづこ若菜つみてん

〈右歌〉

『遠島御歌合』四番右・八・如願法師

天の戸のあけゆく空はうれしきを猶はれやらず立つ霞かな

【語釈】

①権大納言藤原朝臣公基―西園寺実氏男。承久二年(一二二〇)生

まれ。母は藤原親雅女。正二位右大臣に至る。文永十一年(一二七四)

没。主として嵯峨院歌壇で活躍。

②たてるやいづこ―霞はどこにたつているのか、の意。「春霞たて

るやいづこ朝日かげさしゆく舟をまつがうら島」(『後鳥羽院御集』・

一五一九)、「はるがすみたてるやいづこはるをまつころよりこそ

たちはじめけれ」(『千五百番歌合』百一番右・二〇二・源兼行)等

の先行例がみえる。「はるがすみたちにしものをいまもなほよしのやまにゆきのみぞふる」(『躬恒集』・三〇九)の如く、霞と雪はしばしば組み合わされるが、当該歌では、冬の景物である雪のみが眼前にあり、春の景物である霞が確認できない状況を詠む。

③左近少将藤原朝臣為教―嘉祿三年(一二二七)年生まれ。為家男。母は宇都宮蓮生女。京極家の祖。為氏・源承の同母弟。非参議従二位に至る。『河合社歌合』以下、多くの歌合に出詠。

④あら玉の―枕詞。平安時代以後になると、「あらたまの年立帰る朝よりまたる物はうぐひすのこゑ」(『拾遺和歌集』巻第一・春・五・素性)のように、「年」に続き、「あらたまの」に「改まる」の意を響かせる例が多く見える。「あらたまのはる」では、当該歌が早い例で、他に「いづる日の影ものどけき今朝よりやあら玉の春はきぬらん」(『嘉元百首』立春・二五九九・権大納言局)、「行かへり又あらたまのはるきぬとおもふにやがてたつかすみかな」(『伏見院御集』・七一一)等がみえる。万葉時代の「あらたし」の語感が響いているとも考えられよう。

⑤天の戸明暮みなれて侍れは―春の始めを詠じる際に、「天の戸」が頻繁に詠み込まれていることを指す。「早春霞」題においては、四首(一番左・後嵯峨院、五番右・為教、六番左・為経、七番左・通成)確認できる。

【通釈】

五番

左歌 勝

権大納言藤原朝臣公基

今(この瞬間)もまだ(眼前には本来冬のものであるはずの)雪が降っては降ってはして、(春になったら見えるはずの)朝の霞は、いつたいどこに立っているのだろうか。(暦の上では)春はもう到来しているのになあ。

右歌

右近少将藤原朝臣為教

明け方の空は(昨日までと違って)霞みわたり、また新しい春がやってきたことよ。

〔判詞〕左歌の「雪は降つゝ朝霞たてるやいつこ」とありますが、(全体的に)非常によろしいでしょうか。右歌の「天の戸(の明ゆく)」という表現は(文字どおり)明け暮れ見なれておりますので(珍しくなく)、いかにも左歌を勝とする。

〔六番〕

六番

左

①中納言藤原朝臣為経

春たては天つ岩戸の明るより神代も先や霞初けん

右

③散位藤原朝臣信実

朝霞風も音せぬあら玉の春は先こそのとけさをみれ

左はすかたよろしく、詞優に侍るめり、右霞も心こもりて、ちからあるさまに侍るを、あら玉の春とつゝけたる、少しおほつかなく侍る、あら玉の夏冬など申侍るへきにや、しはらく以左為勝

【校異】

イ 勝一ナシ(書) ロ つ一の(聚)(永)(国) ハ 藤原朝臣一ナシ(書) ニ のとけきをみれ一のどけきをみれ(書)(聚)(内)(支)、のとけきをみれ(永) ホ 左一左(永) ヘ 侍るめり一侍り(支) ト たる一たる事そ(永) チ 少し一ことにすこし(書) リ など一なとも(書)(永)

【他所書伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『夫木和歌抄』巻第一・春部一・二一九・藤原信実

宝治元年仙洞十首歌合、早春霞

同

朝がすみ風も音せぬあら玉の春は松こそこのどけきを見れ

【語釈】

①中納言藤原朝臣為経一藤原資経男。母は藤原親綱女。承元四年(二二二〇)生まれ。弁官を歴任し、正二位中納言に至る。『宝治百首』等に出詠。

②神代一我が国で神々が国造りをし、統治していた時代。記紀では、

天地開闢から神武天皇の前までを指す。

③散位藤原朝臣信実一藤原隆信男。母は藤原長重女。治承元年(二二七七)生まれ。正四位下に至る。『河合社歌合』を主催し従弟の為家を判者として迎える一方、反御子左派の蓮性等とも交渉があった。文永二年(二二六五)没。

④風も音せぬ一「いなばふく風も音せぬ我が宿は秋たちぬともよそにこそぎけ」(『林葉和歌集』第三・秋歌・三五〇)、「中中に風もおとせぬ夕ぐれのみ山の秋はこころすみけり」(『後鳥羽院御集』・一七二二)の如く、風さえも音をたてないという意。当該歌では、「をさまれる世のためしとやかきとめし風もおとせぬあら海の波」(『正治後度百首』禁中・二八三・藤原雅経)と同じく、太平の御代を暗示している。

⑤のとけさ一ゆつたりと落ち着いている様。「吹く風によその紅葉はちりくれど君がときは影ぞのどけき」(『拾遺和歌集』巻第五・賀・二八二・小野好古)、「君が世のながらの山のかひありとのどけき雲のゐる時ぞ見る」(『拾遺和歌集』巻第十・神楽歌・五九八・大中臣能宣)等と同様、天下太平の意を含む。

⑥すかた一姿。ここでは一首全体の表現様式を指し、「心」「詞」といった歌の要素を指す語に対応する概念。

⑦優一典雅で上品な美しさ。柔和でしとやかな美しさをいう。平安末期以後の多くの歌合判詞に用例が見い出せ、流派を越えた普遍的な概念であったことが伺える。

⑧心こもりてーここでの「心」は、表現として具体的に示された作家主体の感動や情趣、情緒等を指し、「心こもる」で、作歌主体の情趣が詠歌に定着していることを意味する。為家判の用例としては、「ときはなる木葉隠はかはらねど月は冬こそさえまざりけれ」(『河合社歌合』六番左・一一・兵衛督)に対する「月は冬こそといへるふる事も、ときはなるとては、まことに木の葉がくれ、こころもこもりてめづらしく見え侍るべし」等があげられる。

⑨ちからあるさまー為家が『河合社歌合』で「たが為のあふせをよはに尋ぬらん河なみ千鳥立ち鳴くなり」(十五番左・二九・祝部成茂)を「左、上句ちからあるさまに侍るを、末句すこしおぼつかなきやうにや侍らん」と判じている如く、読み手へ訴えかける表現の説得力を意味する。

⑩あら玉の夏冬ー「あら玉」は、年や月にかかる枕詞。「あらたまのはるのはじめにふるゆきはいつしかさけるはなかとぞ見る」(『六条修理大夫集』・四二)、「あらたまのはるをむかふる年の内におこもれるとやらふこゑじゑ」(『正治後度百首』公事・二九五・藤原雅経)等の例がみえる。

【通釈】

六番

左歌 勝

立春になると、天の岩戸が開けるように夜が明けて、今と同じようにに神代の昔も、まづ霞が立ち初めたのであろうか。

中納言藤原朝臣為経

右歌

散位藤原朝臣信実

朝霞がたゆたい、風さえも音をたてない新春は何よりもまづゆつたりとした雰囲気を感じることだ。

〔判詞〕左歌は姿はよく、言葉は品格があるでしょう。右歌は「霞」にも心がこもって、表現の持つ説得力がありますが、「あら玉の春」と続けたのは、(詠み方として)少しはつきりしません。「あら玉の夏・冬」等と申すべきでしょうか。ひとまず左歌を勝とする。

〔七番〕

七番

左

右衛門督源朝臣通成

天の戸の明るやをそき立春の霞て見ゆる横雲の空

右

右近権中将源朝臣雅光

まきもくのあなしの松原猶さえて都の空はうす霞つゝ、
左天の戸、させる難なく侍るにや、右あなしの松原猶さえてと見えては、都の空のうす霞はるかにへたて、知かたくや侍るへき、よこ雲の空、心見えわかれ侍れば、左なを勝侍るへし、

【校異】

イ 勝ーナシ(書) 口 源朝臣ーナシ(書) 八 のーを(書)(永)
ニ 近ー近衛(支) ホ 源朝臣ーナシ(書) へ 原猶ーはらを猶

(永) (支) ト えーナシ(書) チ はーナシ(支) リ て、ー
たりて(書) (永) ヌ 左ーナシ(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九二

(宝治御歌合)
(同)

通成卿

あまの戸のあくるやおそき立つ春の霞みてみゆるよこ雲のそら

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①右衛門督源朝臣通成ー貞応元年(一二二二)生まれ。源通方男。

母は一条能保女。正二位内大臣に至る。弘安九年(一二八六)没。

②横雲ー夜明け方東の空に棚引く雲で、『文選』『高唐賦序』の「朝

雲暮雨」を踏まえて創作された表現。「霞たつすゑの松山ほのぼの

と波にはなるる横雲の空」(『新古今和歌集』巻第一・春歌上・

三七・藤原家隆)、「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる

横雲のそら」(同・三八・藤原定家)等が早い例で新古今時代に流

行。

③右近権中将源朝臣雅光ー源通光男。嘉祿二年(一二二六)生まれ

(『公卿補任』)。文永四年(一二六七)没。正二位権中納言に至る。

勅撰集には入集していない。左歌作者通成とは従兄弟同士。

④まきもくのあなしの松原ー「まきもく」は、「まきむく」とも。大

和国の歌枕。現在の奈良県桜井市穴師一帯の地。「あなし」は、今

の桜井市穴師。巻向の中心の地で垂仁・景行両天皇の皇居があった
ところ。「巻向之」松原丹立流 春霞 鬱之思者 名積米八方(『万
葉集』巻第十・春雑歌・一八一七)、「まきもくのひばらの霞立返り
かくこそは見めあかぬ君かな」(『拾遺和歌集』巻第十三・恋三・
八一六・よみ人しらず)等、「まきむ(も)くのひばら」と詠む例
は散見するが、「まきもくのあなしの松原」では、『千五百番歌合』「ま
きもくのあなしのひばら」はるくればかすみをかけて山かづらせり」
(十四番右・二八・寂蓮)が早い例。

⑤都の空ー視点人物からみて都の方角の空を指す。当該歌では、「山
里はまだふるとしの雪ながら都の空はかすみそめつつ」(『洞院撰政
家百首』春・霞五首・九六・但馬)と同様、山里(余寒)と京の都
(早春の景)との対比を詠み込む。

⑥うす霞ー平安末期から用例がみえ、「あさとあけん春のけしきを
思ひいづる心たがはぬうすがすみかな」(『公衡集』春・一)、「見わ
たせばあしたのはらのうすがすみうすきはるのはじめなるらん」
(『広言集』春・三)等、春まだ浅い頃の景物として詠み込まれる一
方、「(海路三月尽と云ふことをよめる)へだてつるやへのしほぢの
うす霞きゆるややがて春の暮れぬる」(『月詔和歌集』巻第三・三月・
二三八・藤原公衡)と、晩春の消えゆく霞の例もみえる。

【通釈】

七番

左歌 勝

右衛門督源朝臣通成

(天の岩戸が開けるかのように) 夜の明けるのが遅いとばかりに立春に(なるや否や) 早くも霞んで見える横雲の空よ。

右歌

右近衛権中将源朝臣雅光

(大和の国の) 卷向の穴師の松原はまだ冷え冷えとしている。一方、都の空の方は、うつつらと霞み霞みしていることだ。

〔判詞〕左歌の「天の戸」は、(詠みぶりに) これといった難点はないでしょう。右歌は(眼前で) 穴師の松原がまだ冷え冷えとしていると見えるので、都の空の薄霞は距離を遙かに隔てており、(都の空の様子) 知りがたいでしょう。(一方、左の歌は下の句の) 「よこ雲の空」は、言わんとしていることがはっきりそれと分かりますので、左歌がやはり勝でしょう。

へ八番

八番

左

① 兵部卿源朝臣有教

きのふまで雪気に曇る天つ空曙かけてはや霞ぬる

右

④ 弁内侍

⑤ 天の原雪気の空のかすまは立ける春もえやはわかまし
 ⑥ 両方雪気の空、いつれさたかに見えわかれ侍らぬを、
 右の霞は、春たしかに顕れて、立まさり侍るにや。

【校異】

イ 源朝臣―ナシ(書) □ 勝―ナシ(書) 八 えやは―えやは
 (永) ニ 両方―両方の(書) (永) ホ 雪気の空―雪け空(内)
 へ いつれ―いはれ(書) ト 霞―段(支) チ 春―はるの(聚)
 リ に―ナシ(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 兵部卿源朝臣有教―建久三年(一一九二)年生まれ。従三位源有通男。母は丹波重長女。非参議従二位に至る。建長六年(一二五四)没。『万代和歌集』等の作者。

② 雪気―雪が降りそうな空の気配。雪交じりの空模様。古来「ゆきげ」は「雪消」の意で詠まれたが、『後拾遺和歌集』「とやかへるしらふのたかのこみをなみゆきげのそらにあはせつるかな」(第六・冬・三九三・藤原長家)は「雪気」の早い例である。

③ 曙かけて―下二段活用「懸く」が季節や時間を表す語を伴った用法で、「み山いでて夜はにやきつる郭公眺かけてこゑのきこゆる」(『拾遺和歌集』巻第二・夏・一〇一・平兼盛)と同様、「くにわたつて」という時間の推移を表す。「曙かけて」の先行例としては、「鶯のあけぼのかけてなくなへに梅と竹とに春風ぞふく」(『拾玉集』第四・四四七四)等がみえる。

④ 弁内侍―後深草院弁内侍とも。生没年未詳。藤原信実女。姉妹に

藻壁門院少将、後深草院少将内侍がいる。東宮時代から後深草天皇に仕える。『河合社歌合』、『宝治百首』等に出詠。

⑤天の原―大空を指す。『万葉集』には、神々が統治する天上の国高天原を指す例もみえるが、この頃は空の異称として定着している。

【通釈】
八番

左歌

兵部卿源朝臣有教

昨日まで雪模様で曇っていた空だが、(立春の今日)夜がほのぼのと明け始める頃になって、早くも霞んだことだ。

右歌 勝

弁内侍

雪模様の空がもしも霞まなかったら、春が来たということも見分けがつかないだろう(実際は霞んでいるので春が来たということがわかることだよ)。

【判詞】両方の雪模様の空は、どちら(が良い)ともはっきりと見分けが付きませんが、右歌の霞は、春がそこにはつきりとあらわれ、一段立ち勝っておりましようか。

〈九番〉

九番

左^イ勝^ヲ

右^ウ近^ナ権^キ中^ナ将^ハ藤^ハ原^ハ朝^ハ臣^ハ師^ハ繼^ハ

君^{キミ}か^カ代^トの^ノ始^{ハジメ}の^ノ春^{ハル}の^ノと^トけ^トき^キを^ヲ空^{カラ}も^トし^リり^テや^ヤ霞^カ立^ツらん

右

右^ウ近^ナ権^キ中^ナ将^ハ藤^ハ原^ハ朝^ハ臣^ハ雅^ハ忠^ハ

此^{コノ}ほ^トは^ハ嵐^ハも^ト雪^{ユキ}も^ト猶^ナさ^エて^テ霞^カぞ^ト薄^トき^ク四^シ方^ハの^ノ山^{ヤマ}の^ノ端^ハ

左^サ御^ミ代^トの^ノ始^{ハジメ}の^ノ春^{ハル}の^ノ長^{チカ}閑^カき^ク心^{ココロ}、捨^スか^カた^ク侍^マら^ウう^ヘに、

右^ミ此^{コノ}ほ^トは^トい^ハひ^ヒ出^デた^ルほ^ト、こ^コひ^ヒね^ネか^カふ^ヘき^キ姿^{サマ}

に^ニ侍^マら^ハね^ハは、是^{コノ}も^トか^カち^ハ左^サに^ニ侍^マら^ハへ^キに^ニや、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) □ 近権―近衛権(支) 八 藤原朝臣―ナシ

(書) ニ のとけさーのどけき(内) (支) ホ 権―衛権(支)

へ 源朝臣―ナシ(書) ト そーに(聚) (内) (支) チ のーナ

シ(支) リ のーナシ(書) (永) 又 出―出し(書) ル 侍ら

ねは―みえ侍らねば(書) (永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①右近権中将藤原朝臣師繼―藤原忠経男。母は藤原宗行女。貞応元年(一二二二)生まれ。正二位内大臣に至る。『宝治百首』作者。

②君か代―あなたの寿命、わが君の寿命。また、治天の君の御代をいう。多く賀の歌で用いられ、御代の恒久を言祝ぐ。

③右近権中将源朝臣雅忠―源通光男。母は藤原範光女。安貞二年(一二二八)生まれ。正二位大納言に至る。『とはすがたり』作者後深草院二条の父。文永九年(一二七二)没。

④此ほととはいひ出たるほと、こひねかふへき姿に侍らねは―初句に「此ほとは」を配置する先行例は、「この程は木のはもしらぬまぎのやに霜をへだててとふ嵐かな」(『玉二集』巻下・冬部・二五六一)、「この程はをられぬ雲ぞかかるらんとづねもゆかじ山のさくら木」(『夫木和歌抄』巻第四・春部四・一〇六五・藤原家隆)等、家隆の五首の他、慈円、為家に二首、定家、藤原基輔、藤原光経等に各一首確認できる。

【通釈】

九番

左歌 勝

右近権中将藤原朝臣師繼
 治天の君の御代の初めの春のゆつたりとした様子を空も分かつて
 いるからだろう、こうして(長閑に)霞が柵引いていることだ。

右歌

右近権中将源朝臣雅忠

この頃は(もう春になつてもよいはずなのに)嵐も雪もまだ寒々
 しくて、霞は四方の山の端に薄くかかっているばかりである。

【判詞】左歌は御代の始まりの穏やかな気分が(よく表れており)、
 捨てがたいようであります上に、右歌の「此ほとは」と(初句に)
 詠み出しているあたりが、望ましい風体でありませんで、この番
 も勝は左歌でしょうか。

〈十番〉

十番

左

沙弥蓮性

春は今と渡りくらし天の原雲①はるかに今朝は霞②める
 右③ 下野

④さほ姫の霞の衣袖さえてたつとはみれと春そすくなき

左と渡りくらし天の原雲井はるかになと、たけ

あるさまに侍るを、しつかに今見侍れは、春は今と

いひて、今朝はかすめると侍ける、今の字の心にやか

よひ侍らん、右霞の衣は猶そすくなきとよみはて

たる⑤歌、近き比おほくなりて、めにたち侍ら

ねとも、覚東なき事侍らねは、右勝に侍らん、

【校異】

イ 今―今は(永)(内)(支) 口 る―り(永)(支) 八 勝―
 ナシ(書)(支) ニ 侍―ナシ(聚) ホ る―り(支) ヘ 字の
 ー字はおなし(永) ト は―ナシ(書) チ 猶―春に(書)、な
 に(永) リ 歌―哥を(支) ヌ 近き比―ちかごろ(書)(聚)(永)
 (内) ル めに―ナシ(書) ヲ 右―右の(永) ワ に―にや(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『蓮性陳状』・一

春は今と渡りくらし天の原雲井遥に今朝はかすめる

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九三

(宝治御歌合)

下野

さほ姫のかすみの衣袖さえてたつとはすれど春ぞすくなき

【語釈】

①沙弥蓮性―藤原知家。法名蓮性。顕家男。寿永元年(一一八二)生まれ。正三位に至るも、嘉禎四年(一二三八)病により出家。正嘉二年(一二五八)没。定家存命中にはその指導を受けたが、定家没後、為家の歌壇支配に不満を抱くようになり、光俊(真観)等と反御子左派を結成。『春日若宮社歌合』では判者を勤めている。

②と渡り―「川や海の瀬を渡る」意が原義。当該歌では、早春の空を海に見立てる。「天の原」「と渡る」の例としては、早く『万葉集』に「山葉 左佐良榎壯子 天原 門度光 見良久之好藻」(巻第六・雑歌・九八八・坂上郎女)とみえる。

③下野―生没年未詳。建長の頃まで生存か。祝部允仲女。兄弟に成茂がいる。源家長室。『宝治百首』等に出詠。

④さほ姫の霞の衣―春の女神。佐保は現在の奈良市北郊の一带。佐保山が当時の平城京のほぼ東北に位置し、東は五行説で四季の春に

相当するので、春をつかさどる女神とされた。秋の竜田姫と対比される。例歌として「さほひめの色めく春に成りにけりかすみの衣いくへたつらむ」(『久安百首』春二十首・五〇九・藤原隆季)、「さほ姫の霞の衣ぬきをうすみ花のにしきをたちやかさねん」(『後鳥羽院御集』・五二二)等がみえる。

⑤春ぞすくなき―「いたづらにすぐす月日はおもほえて花見てくらす春ぞすくなき」(『古今和歌集』巻第七・賀歌・三五二・藤原興風)、「としつきにまさるとしなしとおもへばやはるしもつねにすくなかるらん」(『赤人集』・九)、「あら玉の年にまれなる人までと桜にかこつ春もすくなし」(『拾遺愚草』中・一九六九)のように、春の日数が少なく感じられる意の用例が多く、当該歌の如く「早春の気配が希薄な様」を意味する例は少ない。なお、『為家集』には、「沢水にしづえくちたる川柳まちうる春の色もすくなし」(二〇一一)と、当該歌と同様な例がみえる。

⑥たけあるさま―「たけ」は歌の格調・風格をいう。左歌で、早春の空を海に見立てその雲の遙か先の情景を詠み込んだ点が崇高壮大な様であると評価する。

⑦春は今といひて、今朝はかすめると侍ける、今の字の心にやかよひ侍らん―蓮性詠の内、上の句「春は今」と「今朝」の時間的意味合いに重なりがあることを難じたもの。この為家判を始め、当該歌合で負けを付された四首の判に対して、蓮性は後日『蓮性陳状』を後嵯峨院に奏し、激しく反論している。

【通釈】

十番

左歌

沙弥蓮性

春は今、天の門を渡つてくるらしい。雲のあたりの遙か遠く一面に、今朝は霞が立っていることだ。

右歌 勝

下野

(春の女神である) 佐保姫の霞の衣は(まだ)袖が冴え冴えと冷えているように(立春となり霞が)立っているのは見てわかるけれども、(春になってまだ日が浅いので、一面に霞が立つこともなく、)春(らしき)が少ないことだよ。

〔判詞〕左歌は「と渡りくらし天の原雲井はるかに」など、格調ある風体であります。落ちて着いて今見てみますと、「春は今」と言つて、一方「今朝はかすめる」とありますのが、「今」という字の心に重なっているでしょうか。右歌は「霞の衣はまだ少ない」と詠み終わっている歌で、(このような歌は)近頃多くなつていて、目立ちませんけれども、はつきりしない事はありませんので、右歌の勝でしょう。

〈十一番〉

十一番

左イ

左近イ権中將藤原朝臣為氏

あら玉の年を隔て、朝霞③いつしか春もたちけるかな

右

少將内侍

久堅⑤の天つみ空の朝霞立こそわたれ春やきぬ覽

両方の朝霞、あら玉のとしをへたてト久かたの

そらにたてるほと、いく程の浅深見えわき侍らし、

【校異】

イ 持一ナシ(書) 口 権一衛権(支) 八 藤原朝臣一ナシ(書)、

朝臣ナシ(聚) (内) (支) ニ へたて一へたて、(聚)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九四

(宝治御歌合)

為氏朝臣

あら玉のとしをへだてて朝がすみいつしかはるも立ちにけるかな

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・九五

(宝治御歌合)

少將内侍

久かたのあまつみ空の朝がすみ立ちこそわたればるやきぬらん

『閑窓撰歌合』二十六番左・五〇

廿六番 左

少将内侍

久かたの天つみ空の朝霞たちこそわたれ春やきぬらん

右

前摂政家民部卿

きてみずと人もうらみじいづくにもかくこそ花はさかりなるらめ

【語釈】

①左近権中将藤原朝臣為氏一貞応元年(一二二二)生まれ。為家男。

母は宇都宮頼綱女。二条家祖。正二位権大納言に至る。弘安九年

(一二八六)年没。『河合社歌合』を始め、多くの歌合に出詠。建治

二年(一二七六)、龜山上皇から『続拾遺和歌集』撰進の院宣を受け、

弘安元年(一二七八)に奏覧。

②年を隔て、霞を冬と春との目に見える仕切として見立てる。こ

のような例は、「こそこのふゆことしのはるのしるしにはやまのかす

みぞたちへだてける」(『輔親集』・二)、「立ちかはる春をしれとも

みせがほに年をへだつる霞なりけり」(『御裳濯河歌合』十一番左・

二二)等、散見する。

③朝霞一朝立つ霞。勅撰集における「朝霞」の初例は、「あさがす

みふかく見ゆるや煙たつむろのやしまの渡なるらむ」(『新古今和歌

集』巻第一・春歌上・三四・藤原清輔)で、二十一代集全体でも

十五例と多くはない。当該歌の如く、春の端緒としての「朝霞」の

早い例として、「かづらきやたかまの山のあさがすみ春とともに

立ちにけるかな」(承暦二年『内裏後番歌合』二番右・四)がみえる。

④少将内侍一後深草院少将内侍。生年未詳。文永元年(一二六四)

頃まで生存か。藤原信実女。姉に藻壁門院少将一弁内侍がいる。

⑤久堅の天つみ空一「久堅の」は、天、雨、空、雲、日、光等にか

かる枕詞。「久方」とも。「久堅之」天水虚尔 照日之 将失日社

吾恋止目」(『万葉集』巻第十二・寄物陳思・三〇一八)、「久かた

の天つみそらに雲まけば月の光ぞ庭に敷きける」(『林葉和歌集』第

三・秋歌・四四五)等が例歌。

【通釈】

十一番

左歌 持

左近権中納言藤原朝臣為氏

(新旧の)年(の間)を分け隔ている(かのように、今眼の前に

みえる)朝霞、(その朝霞をみてはたと気付いたのだが、霞が立つ

たように)早くも立春になってしまったのだなあ。

右歌

少将内侍

空に朝霞が一面に立ち渡ったことだ。(このぶんでは)春はす

に到来しているであろうよ。

〔判詞〕両方の朝霞が、(一方は)「新旧の年を分け隔て」(もう一方

は)「空に立っている」ところは、(両首とも、発想の斬新さは)そ

れほどの深淺(があるとも)分別できませんでしょう。

〔十二番〕

十二番

左

① 左京権大夫藤原朝臣経朝

横雲の霞にまかふ山かつら暁かけて春は来にけり

右

沙弥禅信

春来ぬと思ひもあへず久堅の天つみ空に立かすみかな

左歌は、年の明ゆく山かつら霞をかけて春は

きにけりとて、近き世に見侍しにや、かすみに

まかふとては、いよくみ所なく侍るにやと、右の哥

殊なるとかなく侍れば、尤勝侍るへし、

【校異】

イ 藤原朝臣一ナシ(書)、朝臣ナシ(支) 口 勝一ナシ(書)

ハ の一を(書) ニ は一ナシ(書)(聚)(永)(内)(支)

ホ 侍るにやと一侍るにや(聚)(永)、や侍るべき(書) への

一ナシ(書)(聚)(永)(内)(支)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 左京権大夫藤原朝臣経朝―建保三年(一二二五)生まれ。世尊寺行能猶子。実父は藤原頼資。正三位に至る。建治二年(一二七六)没。

世尊寺流の能書。『宝治百首』の作者。

② 横雲の霞―「春はなほあけゆく空ぞ明けやらぬ霞かかれるよこ雲

の山」(『正治後度百首』霞・二〇二・藤原雅経)と同様、夜明け方

東の空に棚引く雲が霞がかつてい様をいう。「横雲の霞」はその

短縮形。「よこ雲のかすみたなびく木ずるより花になり行く明ぼの

の空」(正治二年『石清水若宮歌合』十四番左・源顕兼・二七)等

がその例。

③ 山かつら―暁に山の端にかかる雲を髪飾りの鬘に見立てた表現。

「山かつら明行く雲にほととぎすいづる初音も峰わかるなり」(『拾

遺愚草』上・一四一八)が一例。

④ 沙弥禅信―源俊平。生没年未詳。泰光男。従五位下侍従に至る。

『宝治百首』等に出詠。主に後嵯峨院歌壇で活躍した。

⑤ 思ひもあへず―おもいもよらないの意。「桜花まつとをしむとす

る程に思ひもあへず過ぐる春かな」(『長秋詠藻』上・一七)、「桜花

思ひもあへずこのもとにちりつものともいかでこそみめ」(『和泉式

部統集』・五三〇)等がその例。

⑥ 年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけりとて、近き世に見侍

しにや―順徳院の家集『紫禁和歌集』七三〇に「同比、二百首和歌」

として「あら玉の年の明行く山かつら霞をかけて春はきにけり」と

みえる。『紫禁和歌集』は、年次を追って配列されていることが指

摘されており、七三〇歌以前の詞書「建保四年正月十九日、松迎春

新」(七一五)、「三月十五日比、内内進北野宮之詩歌合」(七二二)

から、七三〇歌の詠作年次は建保四年(一二二六)頃か。

【通釈】

十二番

左歌

横雲が山に（曇をかけるようにして）霞と見分けがたくなつてい
る。夜明け方にかけて春はきたのだなあ。

左京権大夫藤原朝臣経朝

右歌 勝

沙弥禅信

春が来たと思つてもいないうちに、空に霞が立つていることよ。
〔判詞〕左歌は、「年の明ゆく山かつら霞をかけて春はきにけり」と
いつて、近い折に見ましたでしょうか。「かすみにまかふ」といつ
ては、ますます見るに値する所がないでしょうと（存じます）。右
歌は格別な欠点がありませんので、いかにも勝です。

〈十三番〉

十三番

左イ勝

嘉陽門院越前

明渡る峯の霞を出る日の影も曇らぬ千世の初春

右

前権大納言藤原朝臣為家

いつのまに霞の衣打ヒきハらし雪降空も春はたつらん

左かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春、祝

言ヒことハによろしく侍れは、かすみの衣、かけてもな

らひかたくこそ見え侍れ、おほよそ立春早春は、

いさゝかおもひわくへきにやと見え侍れと、立
春の題に、早春のこゝろよめらんよりは、ことた
かひ侍らしとみゆるし侍るに、是さへ霞の
衣にひかれて、たつとをきて侍る、尤負侍るへし、

【校異】

イ 勝―ナシ（書） □ 藤原朝臣―ナシ（書）、朝臣ナシ（支）
ハ きらし―消えし（書） ニ ことに―まことに（聚）、もことに
（永）、のことに（支） ホ おほよそ立春早春は、いさゝかおもひ
わくへきにやと見え侍れと―ナシ（支） ヘ の―ナシ（聚）（永）（内）
（支）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第一・春部一・八七

同（説書）

為家

いつのまに霞の衣うちきらし雪ふる空もはるは立つらん

【語釈】

①嘉陽門院越前―大中臣公親女。生没年未詳。後鳥羽院の生母七条
院殖子や、後鳥羽院皇女嘉陽門院礼子に女房として仕えた。

②明渡る―あたりが一带に明るくなる意で、雲・霞・霧等が晴れる、
又、夜が明けはなれるのにもいう。「ともしするほぐしの松もきえ

なくにと山の雲のあけわたるらん」(『千載和歌集』卷第三・夏歌・一九七・源行宗)等の例歌がみえる。

③**日の影** 日の光が原義。「千世」「御代」等の語と結びついて、御代の恒久を暗示する。「千世ふべき春の日影は神山のみねよりいづるめぐみとぞみる」(『月詣和歌集』卷第一・四九・源通親)、「小松原春の日影にひきつれて千世のけしきを空にみるかな」(『拾遺愚草』中・一八八〇)等がその例。

④**前権大納言藤原朝臣為家** 一定家男。建久九年(一一九八)生まれ。母は西園寺公経の姉内大臣藤原実宗女。公経猶子。権大納言に至る。若年は蹴鞠に熱中するが、承久の乱以後、本格的に和歌を学び、父の死後歌壇の指導的地位に就き、『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』の撰者となる。家集に『為家集』、歌論に『詠歌一体』等がある。建治元年(一二七五)没。

⑤**打きらし** 雪が空一面を曇らせる意。「うちきらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに驚ぞなく」(『拾遺和歌集』卷第一・春・一一・大伴家持)の如く、「打きらし」は「雪」にかかる。「霞の衣打きらし」と続く文脈では「衣裳をうち着る」の意も響き合う。

【通釈】

十三番

左歌 勝

嘉陽門院越前

夜明けがた、峯を覆っている霞が晴れ渡り、そこから射し出る日の光は一点の陰りもなく輝いており、(この光のように帝の威光も

曇ることなく)永遠に続くと思われる、めでたい初春であることよ。

右歌

前権大納言藤原朝臣為家

いつのまに(春は)霞の衣を着たのであろうか。一面に雪が降っている空ではあつても、もう春にはなっているのであろう。

〔判詞〕左歌の「かすみを出る日影も曇らぬ千世の初春」は、(御代を言祝ぐ)祝言(の詠みぶり)が特に結構ですので、「かすみの衣」という私の歌は、まったくかなわないものと見えます。そもそも立春と早春は、少し気をつけておくべきように見えますけれども、立春の題に、早春の風情を詠むとかいうよりは、(今回のように早春題に立春を詠む方が)矛盾がないものと見過ごしてしまつたのですが、加えて霞の衣からの縁語で、「春が)たつ」と置いたのです。いかにも負です。

(主要参考文献)

- (単行本) 萩谷朴氏『平安朝歌合概説』(昭44 山之内印刷)、安井久善氏『宝治二年院百首とその研究』(昭46 笠間書院)、福田秀一氏『中世和歌史の研究』(昭47 角川書店)、岩佐美代子氏校注・訳『弁内侍日記』(『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』(平6 小学館)所収)、萩谷朴氏『平安朝歌合大成』(増補新訂)『平7 同朋舎出版』、岩佐美代子氏『宮廷女流文学読解考 中世編』(『笠間書院 平11』)、佐藤恒雄氏『藤原為家全歌集』(『平14風間書房』)。(論文) 杉本邦子氏「後深草院少将内侍」『学苑』218 昭33・5)、

- 金子磁氏 「藤原為氏の生涯」 《『立教大学日本文学』》 31 昭49・3》、
 佐藤恒雄氏 「後嵯峨院の時代とその歌壇」 《『国語と国文学』》 54・5
 昭52・5》、武田元治氏 「存直体」と「花麗体」 《『解釈』》 31・7
 昭60・7》、荒木尚氏 「百三十番歌合」考 《『国語国文学研究』》 21
 昭61・2》、池尾和也氏 「後嵯峨院時代歌壇史略年表(中期)」 礎稿 《『皇學館論叢』》 26・6 平5・12》、佐藤恒雄氏 「後嵯峨院仙洞十
 首歌合の諸本」 《『香川大学国文研究』》 26 平13・9》、田淵句美子
 氏 「御製と「女房」」 《『日本文学』》 51・6 平14・6》、山崎桂子氏
 「承明門院小宰相の生涯と和歌」 《『国語国文』》 72・6 平15・6》。

Explanatory Notes of *IN NO ON UTAAWASE* in 1247

— Twentysix Poems under the Title of *SOHSYUN NO KASUMI*—

Kunio ITOH and Yoshikazu FUJIKAWA

‘Hohji-gannen Inno On-utaawase’ was a poetical event which was held in 1247 by the retired emperor GOSAGA. A total of twentysix poets participated in the event and under ten poetical titles including ‘*SOHSYUN NO KASUMI-early spring haze*’ two hundred sixty poems were made. These poems were combined as a couple and were judged a victory or defeat by FUJIWARA TAMEIE. In this article we tried to appreciate twentysix poets, 13 sets, having ‘*SOHSYUN NO KASUMI*’ title.